

1 文(文章)で解答する設問の答案については、次のA項の加点要素の合計から次のB項・C項の減点要素の合計を引いた得点をその設問の得点とします。ただし最低点は0点としマイナスの得点はつけません。

A

a 以下の採点基準では、模範解答をいくつかの要素に分割し加点要素とします。答案中にその加点要素に相当する部分があれば、その加点要素に配点された得点を与えます。

b ある加点要素は、その加点要素に配点された得点か0点で採点することを原則とします。たとえば5点配点された加点要素であれば5点か0点で採点することを原則とします。

ただし、その加点要素中の部分点を認める場合もあります。その場合それぞれの採点基準の中に明記されていません。

c ある要素に加点するか否かが、他の要素と無関係に決まる場合と、他の要素との関係で決まる場合があります。前者の場合は、その要素を単独採点(独立採点)すると言いその旨必ず明記されています。後者の場合は、他の要素との関係について以下の採点基準で具体的に指示されています。

d **解答通り**という条件がある場合はいかなる部分点も認めません。

B

a 答案中に大きな誤読と判定される内容(語句)などがある場合は、その内容(語句)を減点要素として示されている場合もあります。

b 加点要素でも減点要素でもない部分もあります。その部分は加点も減点もしません。

C

次に該当するものは、答案の形式上の不備として、一箇所につき1点の減点要素とします。

a 誤字。漢字などの文字の明らかな誤りは誤字とします。

b 脱字。

c 文末の句点の脱落。

※字数指定のない場合、句点の脱落は誤字とし1点の減点とします。

d その他不適切と判断せざるをえない箇所。

e 不適切な文末処理。設問の問い方に対応していない形で答案の文末を結んでいない場合は、適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備による減点要素とします。

たとえば「:とはどういうことか?」という問いに体言で結んでいないものなどは適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備とします。

また、理由が問われているのに、「から」「ので」などで結んでいないものなども適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備と見ます。

※ただし、「ことである」などの表現も「こと」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また、「からである。」などの表現も「から」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。

また文末の表現を問わない場合もありますが、その場合はその都度明記されています。

2 日本語の表現として不適切なものは程度に応じて減点します。

3 次の各項に該当するものは、部分点の要素があっても、その設問の得点を0点とします。

a 答案が解答欄の欄外にはみ出しているもの。

b 一行の解答欄に二行以上書いた場合もその設問の得点を0点とします。

c 字数指定のある設問で、字数をオーバーしたものの。

d 答案の文章が最後まで完結していないもの。

4 **古文あるいは漢文の訳を記述する設問**の場合も以上に準じますが、文末の句点や文末の処理あるいは答案の完結にこだわらなくともよい場合はその都度明記されています。

□ (評論) 採点基準 (合計 50点)

問一 10点

【模範解答例】現在の惨状にこれ以上苦しまないように、 (A 5点)  
未来に対するねがいの気持ちを口に出すかたちで、  
嘘いつわりは生まれてくるということ。 (B 5点)

◎各加点要素の加点の条件

【A・Bに関して部分採点を行う】

A 現在の惨状の指摘 〓現在の惨状を限りたくなる 〓現在の惨状にこれ以上苦しまないように 〓自分たちの実人生をすこしでも向上させたいが、それがうまくはこばない

※「人生をすこしでも向上させたい」だけなら3点

※単に「人生」とだけ指摘し、現状が惨状であることが読み取れない場合は、Aは得点なし。

B 未来に対するねがいの気持ち (ありたい未来、あらましごと) を口に出す

問二 5点

二

問三 各2点

イ・へ

問四 5点

ホ

問五(1) 8点

【模範解答例】 実際には与えなかったが、 (A 2点)  
山村の子供の赤くなつた手のひらを見たときに (B 3点)  
金銭を与えたくなくなったため、「銭くれて」と表現した。 (C 3点)

◎各加要素の加要素の条件

- 【A↖Cに関して部分採点を行う (A↖Cそれぞれ単独に採点を行って構わない)】  
A 金銭を実際には与えなかったが  
B 子供の赤くなつた手のひらを見たとき (条件)  
C 金銭を与えたくなくなったため、「銭くれて」と表現した

問五(2) 8点

【模範解答例】 実際には青くはなかったが (A 3点)  
旅人にはまるで海の青さを宿して青くなつたように感じられた蟹の瞳を、  
「青き瞳」として表現した。 (B 5点)

◎各加要素の加要素の条件

- 【A・Bに関して部分採点を行う (A・Bそれぞれ単独に採点を行って構わない)】  
A (蟹の瞳は) 青くはなかった  
※「蟹の子の瞳は」でも可  
B 旅人には海の青さを宿して青くなつたように感じられたので、「青き瞳」と表現した。

問六 5点

ホ

問六 5点

口

二 (評論) 採点基準 (合計 50 点)

問一 各2点 (計8点)

- 1 墮落      2 崇拜      3 土壤      4 規範 (「軌範」も可)

※解答通り

問二(1) 6点

【模範解答例】 日本固有の神々と伝来した仏教とを (A 3点)

融合調和させること。 (26字) (B 3点)

◎各加点要素の加点の条件

※A・Bに関して部分採点

A 「日本固有の神々と伝来した仏教とを」 (3点)

※「神仏」の説明。

○「日本に存在していた神と渡来した仏教とを」も可。

△「神と仏を」は、日本固有のものであることと伝来したものであることの違いが不明瞭であるので、「日本固有のもの」がなければ1点減、「伝来した」がなければ1点減とし、この場合は両方がないため▲2点減で△2点。

B 「融合調和させること」 (3点)

※「習合」の意味の説明。

△「統一させること」は、「習合」の意味の「折衷」の意味からそれるので▲1点減で△2点。

△「ともに存在させる」は、「習合」の意味の「折衷」の意味からそれるので▲1点減で△2点。

△「和解させる」は、本文の表現のままなので▲1点減で△2点。

△「両立」は「習合」の意味の「折衷」の意味からそれるので▲1点減で△2点。

問二(2) 6点

【模範解答例】 世界は物質から成り立っており、 (A 3点)

死は無であるという考え。 (27字) (B 3点)

◎各加点要素の加点の条件

A 「世界は物質から成り立っており」 (3点)

※「唯物論(的)」の説明。人間の体の話にのみ終始している場合は、唯物論の説明として不十分でAは得点なし。

B 「死は無であるという考え」 (3点)

※Aとの関係での「死生観」の説明。

問三 8点

【模範解答例】

現実の世界は負の価値を持つものとして (A 2点)

否定的に捉えられるが、 (B 2点)

宗教上の教えによってその状況を乗り越えることで、 (C 2点)

自らの存在を絶対的なものとして認識すること。 (78字) (D 2点)

◎各加点要素の加点の条件

※A・B・C・Dに関して部分採点

A 「現実の世界は負の価値を持つものとして」(2点)

※傍線部「否定」の具体的な説明。

B 「否定的に捉えられるが」(2点)

※Dとの関係から、傍線部「否定」を指摘。

C 「宗教上の教えによってその状況を乗り越えることで」(2点)

※傍線部の後の具体例を一般化した説明。

○「信仰対象の解脱や救済を通じて」も可。

△「宗教によって」は、宗教が現実の苦を取り除くという意味合いが明確ではないので▲1点減で△1点。

D 「自らの存在を絶対的なものとして認識するということ」(2点)

※「存在肯定」の具体的な説明。

×「神仏を肯定すること」は×0点。

問四 10点

【模範解答例】

原初的な信仰の死生観は、 (A 1点)

死をこの世界の内部に具体的に存在するものとして (B 2点)

生と連続的に捉えるが、 (C 2点)

高次宗教の死生観は、 (D 1点)

死を抽象化し、 (E 2点)

死をこの世界とは別の理念化された概念的なものとして捉えるという点。

(96字)(C 2点)

◎各加点要素の加点の条件

※A・B・C・D・E・Fに関して部分採点

A 「原初的な信仰の死生観は」 (1点)

※二つの層のうち、一方の指摘。

○「原初的な信仰では」も可。

B 「死をこの世界の内部に具体的に存在するものとして」 (2点)

※原初的な信仰における死生観を具体的に説明。

※「この世界の内部に」という内容に1点、「具体的に」に1点。

C 「生と連続的に捉えるが」 (2点)

※原初的な信仰における死生観を具体的に説明。

D 「高次宗教の死生観は」 (1点)

※二つの層のうち、他方の指摘。

○「高次宗教では」も可。

E 「死を抽象化し」 (2点)

※高次の宗教での死生観の具体的な説明。

○「死を概念的に捉え」「死を理念的に捉え」も可。

F 「死をこの世界(この世界)とは別のものとして捉えるという点」 (2点)

※高次の宗教での死生観の具体的な説明。

○「この世界とは異なる場として捉えるという点」も可。

○「生とは離れたものとして捉えるという点」も可。

問五 12点

【模範解答例】

原初的な信仰や高次の宗教では、考え方に違いはあっても、  
生と死を包含したものと捉える点では共通していたが、  
近代では一義的に生の拡大を求めるようになり、  
死を無と考え、  
忘れ去っているということ。  
(A 2点) (B 2点) (C 3点) (D 3点) (E 2点) (96字)

◎各加点要素の加点の条件

※A・B・C・D・Eに関して部分採点

A 「原初的な信仰や高次の宗教では、考え方に違いはあっても」(2点)

※前近代の死生観に違いがあることの指摘。(問四での理解)

B 「生と死を包含したものと捉える点では共通していたが」(2点)

※前近代の死生観の共通性を指摘。(問四での理解)

○ 「死に一定の場所を与えるという点では共通していたが」も可。

× 「生と死は連続しているという点で共通していたが」は、問四の答えと矛盾するので×0点。

C 「近代では一義的に生の拡大を求めるようになり」(3点)

※近代の死生観の説明。

※「近代」に1点、「二義的に(生のみ)」に1点、「生の拡大を求める」に1点。

○ 「近代になって生のみを追求するようになり」も可。

D 「死を無と考え」(3点)

※近代の死生観の説明。

△ 「唯物論的な死生観を持つようになり」は、問二で具体化したことが生かされていないので、  
▲2点減で  
△1点。

E 「忘れ去っているということ」(2点)

※「空洞化」の言い換え。

三 (古文) 採点基準 (合計 50 点)

問一・A 4 点

【模範解答例】雷が鳴り静まらないで、 (A 1 点)

何日にも (B 2 点)

なった。 (C 1 点)

【各部の採点】4 点満点。加ポイント 2 箇所。

A 「雷が鳴り静まらないで」…1 点。完答。「で」が打消接続「くしないで」と訳してあること。「カミナリが静まらないで」も可。

B 「幾日に」……………2 点。完答。「数日に (も)・幾日に (も)」でも可。

C 「なった」……………1 点。完答。動詞「成る」で訳してあること。加えて完了の意。「経った」も可。

問一・E 4 点

【模範解答例】ますます (A 1 点)

涙があふれてしまいそうで、 (B 1 点)

目の前が真つ暗になるような (C 1 点)

お気持ちになる。 (D 1 点)

【各部の採点】4 点満点。加ポイント 3 箇所。

A 「ますます」…1 点。「ますます・いっそう・どんどん」と訳してあること。「たいそう」は×。

B 「涙があふれてしまいそうで」…1 点。「泣きそうで」「涙がこぼれそうで」も可とする。

C 「目の前が真つ暗になるような」…1 点。「気持ちがしずみがちに・悲しみにくれる」も可。

D 「お気持ちになる」…1 点。「お思いになる」も可。「思う」＋尊敬の意。

問一・F 6 点

【模範解答例】雷が頭上に落ちたかと思われると、 (A 2 点)

そこにいるすべての人 (B 2 点)

気丈な人は誰もいない。 (C 2 点)

【各部の採点】6 点満点。加ポイント 3 箇所。

A 「雷が頭上に落ちたかと思われて」…2 点。完答。「雷」の補足＋完了の意＋単純接続「くると」。

B 「そこにいるすべての人」…2 点。完答。「その場の人すべて」のニュアンス。

C 「気丈な人は誰もいない」…2 点。完答。「さかし」を「気丈な」もしくは「気の確かな」と訳してあること＋「人もいない」の意。



問一 各2点×4 (計8点)

1 || へ

2 || ハ

3 || ホ

4 || イ

問三 各2点×2 (計4点)

(1) 跡絶え

(2) 二

問四 7点

【模範解答例】光源氏の、 (A 1点)

都恋しさのあまり、 (B 2点)

普段なら遠ざけたくなるようなみすぼらしい下人さえも (C 2点)

親しく思われる心情。 (49字) (D 2点)

【各部の採点】7点満点。加点ポイント4箇所。

A 「光源氏の、」心情」：1点。主体の明記と文末処理。

B 「都恋しさのあまり」：2点。都を恋しく思う気持ちが書いてあること。

C 「普段なら遠ざけたくなるようなみすぼらしい下人さえ」：2点。「都からの使いというだけで、」という解答は1点。

D 「親しく思われる」：2点。「親近感を持つ・近づけたくなる」のような内容。

問五 6点

【模範解答例】紫の上の、 (A 1点)

光源氏を思いやるあまり (B 2点)

涙のかわく間もない様子。 (28字) (C 3点)

【各部の採点】6点満点。加点ポイント3箇所。

A 「※紫の上の：様子」：1点。主体の明記と文末処理。

B 「※光源氏を思いやるあまり」：2点。「都から遠く離れた」光源氏を心配する」というニュアンス。

C 「涙のかわく間もない」：3点。「涙にぬれる」はマイナス1点。ずっと涙にぬれて、乾く間もないというニュアンス。「〜ている」という存続表現なら可とする。

※紫の上が光源氏を思いやっているというような主体と客体のつながりでないものは零点とする。

問六 7点

【模範解答例】 供の人々の、 (A 1点)

我が身に代えてでも、 (B 1点)

光源氏をこのような地に埋もれる窮地から救いたいと (C 3点)

仏神に祈る様子。 (48字) (D 2点)

【各部の採点】 7点満点。加ポイント4箇所。

A 「※供の人々の：様子」：1点。主体の明記と文末処理。

B 「わが身に代えてでも」：1点。「自分はどんなつてもかまわないから」のニュアンス。

C 「※光源氏をこのような地に埋もれる窮地から救いたいと」：3点。完答。光源氏をこの僻地で終わらせず、都へ戻ってあげたいというニュアンス。

D 「仏神に祈る」：2点。伴の者たちの神への祈りというニュアンス。

※「供の人々の光源氏に対する気持ち」という構造になっていないものは零点とする。

問七 各2点(計4点)

ハ・ニ

【四】(漢文) 採点基準 (合計 50 点)

問一 各2点×4 (計8点)

a 〓 かつて      b 〓 けだし      c 〓 もとより

d 〓 よりて (よつて)

採点基準

- ・ d は「よつて」も可。
- ・ 送り仮名不足 0 点。      例    a 〓 かつ      c 〓 もと

問二 6 点

【模範解答例】 王羲之が (A 2 点)

池の側で (B 1 点)

書の稽古に (C 1 点)

精励したから。 (D 2 点)

採点基準

A … 王羲之の「羲」を「義」などに誤っているもの、1 点減点。

(ただし、解答に何度も同じ誤字があっても、初出にのみ減点をする。)

「羲之」のみも可とする。ただし、「王」は不可。

B … 「池を臨んで」「池に臨んで」は不可。

「池のそばで」「池のほとり」など可。

C … 書の練習・鍛錬など可。「書を学んだ」は書き下しのままなので不可。

D … 熱心に・努力・精進・うちこんだなど、同内容があれば可。

問三 5 点

二

問四 7点

【模範解答例】

王盛が (A 2点)

墨池のいわれを書いてほしいと (B 1点)

筆者に (C 2点)

依頼したということ。 (D 2点)

採点基準

A：「王盛」は「学舎の教官」も可。

B：「いわれ」は「由来」なども可。「墨池について」は不可。

C：「筆者」は「曾輩」も可。

D：「依頼した」は「頼んだ」も可。

問五 5点

使<sub>二</sub>後人尚<sub>レ</sub>之如<sub>レ</sub>此。

問六 7点

【模範解答例】

まして仁愛の徳を備えた人や厳正な君子の

後世に残した風格や思想が、 (A 2点)

後世の人々に与える影響の大きさは (B 2点)

どれほどのものであろうか。 (C 3点)

◎採点基準

A 注をそのまま使う。

B 「影響の大きさ」は「影響」のみも可。

C 影響が大きいという内容ならば可。

問七 各12点

- 【模範解答例】王羲之の書は、 (A 2点)  
 不断の努力によるもので、 (B 1点)  
 生まれつきのものではない。 (C 1点)  
 一芸に秀で、尊敬を集めている王羲之でも (D 2点)  
 努力を要したのだから、 (E 2点)  
 道徳の奥義に達しようとする学生は、 (F 2点)  
 いっそう努力しなければならぬ (G 2点)  
 ということ。

◎採点基準

- A 「王羲之」のみは1点。(Dと総合的に採点する)
- B 不断の努力によるものという内容。
- C 生まれつきのものではないという内容。
- D 「王羲之」が世の中から高く評価されていること。尊敬されていること。「書聖」と称されていることが指摘できていればaとd両方があると認め、(aとd合わせて)4点とする
- E 「努力」が必要という内容を含めば可。
- F 「学生」のみは1点。  
 「誰でも」や「人は」と一般化したもの1点。
- G 「いっそう」がないもの1点。  
 「努力しなくければならぬ」「すべきだ」「必要がある」などの主張がなくてはいけない。  
 「努力をすればできる」で終わっているものは減点1。